



「ともに生きる」を考える。(2)

日頃より、NPO 法人道の活動にご協力賜り、心より厚く御礼申し上げます。今回も総会の開催、活動報告が遅れてしまい、大変申し訳ありません。

さて、年明けの全体ミーティングで、令和7年の道工房のキーワードは、「エコール・ド・カマクラ」と「発菩提心」と発表しました。

「エコール・ド・パリ」。これは、20世紀前半に、各地からパリのモンマルトル（セーヌ川の右岸）やモンパルナス（セーヌ川の左岸）に集まり、活動した、出身国も画風も様々な画家たちの総称で、「パリ派」を意味します。

そして、21世紀前半の鎌倉。アートイベントを多数手がける「佐助カフェ（鎌倉駅西側）」と、障害福祉サービス事業所「道工房（鎌倉駅東側）」を中心に集まった、国籍や年齢、経歴や実績などに関係なく、真の創造的な欲求から作品を生み出す多様なアーティストたちを「エコール・ド・カマクラ＝カマクラ派」と称し、その作品を展示する「第1回エコール・ド・カマクラ サマーエキシビション」を開催します。出展数は約120点、約70点が何らかの障害を持つアーティストの作品となります。

「エコール・ド・カマクラ＝カマクラ派」を称することにより、従来使用されている「障害者アート」「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」等の呼称によって引き起こされる障害者の作品に対する先入観をなくし、公平で偏見のない視点からアートを鑑賞してもらうとともに、一流の先生方に審査をしていただく機会を提供したいと考えています。これは、私が常に模索していた「障害の有無に関係の無いアート」を既実践をされていた佐助カフェ&ギャラリーの島崎氏と出会い、意気投合して、実践するに至った次第です。

もう一つの「発菩提心」。菩提心とは簡単に言えば本当の自分。ドナルド・W・パフ『利己的な遺伝子 利他的な脳』によると、チンパンジーに食べ物と交換できるコインを与える実験を行ったところ、被験チンパンジーは、自分だけが餌を貰える「利己的で排他的な」色のコインよりも、自分だけでなく他のチンパンジーも餌を貰える色のコインを選ぶ確率が高かったそうです。この本の訳者で脳科学者の福岡伸一氏によれば、最新の研究によって生物には遺伝子レベルで利他的な振る舞い、つまり“人助け”をする生物学的なしくみが備わっていることが明らかになりつつあるそうです。つまり「本当の自分」は利他的であると言えます。利他的行動へのステップの中では、他人に向かって行動を起こす人の脳内で、対象となる人のイメージと自分自身のイメージの差が、無意識のうちにゼロになるそうです。世界的数学者の岡潔先生は、幻の書となった『春雨の曲』の解説となる京都産業大学の講義の中で、「自分は自分という名の自分、他（ひと）は他という名の自分、その他の自然は自然という名の自分」と教えています。岡先生が守られた戒律「自分を後にする」つまり自我を抑えて真我になると、自他の区別がなくなり、自分も他人（ひと）も自然も同じ心の中の一つの個になるということを実証している様な気がします。

積極的に他者を助けて脳に存在する“利他性”に関する神経回路を活性化させることで、自分自身もまた幸福度が高まるそうです。ただし利他性を発揮するための脳の回路は、利己的な考えを持つ仲間とつるむことによって低下することもわかっているそうです。私たちの事業所では、お互いに思いやりの心（利他の心）を発してふるまう雰囲気醸成させ続け、そのことで確実に病気が良い方向に向かい、生きづらさも軽減していく事実が確実に見て取れます。

(岩立)